

b 市内出土の瓦塔・瓦堂について(第77・78図、第29表)

千葉市域で瓦塔が出土している遺跡は、千葉寺跡・生実城跡・黒ハギ遺跡・葭山遺跡・谷津遺跡・越川戸遺跡の6遺跡と昭和の森遺跡群内(辰ヶ台遺跡?)の1地点がある。報告書などで図面などが公開されているものは、千葉寺跡・生実城跡・葭山遺跡・谷津遺跡・越川戸遺跡の5遺跡の資料がある。本項では、谷津遺跡例以外の図面を集成し、一部再実測して掲載している。なお、黒ハギ遺跡は未整理で報告書刊行まで至っておらず、昭和の森遺跡群内のものは辰ヶ台遺跡の調査時に採集された遺物のようだが、辰ヶ台遺跡の報告書刊行時に未掲載のままであったものである。以上のことと踏まえ、遺物の概略と出土時の状況などについて判る範囲で整理を行うこととする。

千葉寺跡出土瓦塔(1-1・2): この遺物は、県立千葉高校で保管・管理されている資料である。千葉寺跡の発掘調査は過去に5回行われており、瓦塔がどの調査時の遺物かは不明である。『千葉市史』(以下、市史)によれば「旧境内の東北隅」の第三号堀坑から出土したと記されている。市史では、写真のみの掲載であったが、『千葉県の歴史・資料編考古3(奈良・平安時代)』において、二片の屋蓋部の図面が掲載された(第77図の図面は、本書より一部改変の上、転載させていただいた)。

これらの部位は屋蓋部である。丸瓦(幅約1.5cmで、継ぎ目部分に幅約2cm)は、棒状粘土を貼り付けて瓦の継ぎ目(継ぎ目間の長さ約2.8~3cm、先端から2列目が約2cm、先端が1.8cm)を表出させている。平瓦(幅約2cm、継ぎ目部分の幅約1.6cm)は、丸瓦間に平坦面をつくり継ぎ目を施している(継ぎ目の幅は、丸瓦に対応している)。軒裏表現は、地垂木と飛檐垂木をヘラによる削り出しによって表現し、垂木ごとの幅は約2.8cm、飛檐垂木の長さは約1.5cmである。垂木自体の幅は約1cmで飛檐垂木の方がやや幅が広い感がある。瓦当面表現はない。なお、焼成具合は還元焰焼成である。これらの特徴は、池田敏宏氏の研究(池田・1999・2000)によると勝呂類型に相当すると考えられる。

生実城跡出土瓦塔(2-1・2): 3次調査(平成4年度)のB区の井戸と6次調査(平成8・9年度)の第1号堀で出土した2点の資料がある。両方とも中世遺構の覆土中出土の遺物であり、奈良・平安

第30表 市域出土瓦塔・瓦堂一覧

図面	遺跡名	焼成具合	部位	屋蓋部類型	出土状況	備考
1-1	千葉寺跡	還元焰焼成	屋蓋部	勝呂類型	第三堀坑	県立千葉高校保管 系原(1998)
1-2	千葉寺跡	還元焰焼成	屋蓋部	勝呂類型	第三堀坑	県立千葉高校保管 系原(1998)
2-1	生実城跡	酸化焰焼成	初軸輪部		第1号堀 17	菊池(2001)
2-2	生実城跡	還元焰焼成	屋蓋部	大仏類型	3B区1号井戸	長原(2002)所収分を再実測
3-1	黒ハギ遺跡	還元焰焼成	初軸・基壇部		C1区SX-2206	未報告
3-2	黒ハギ遺跡	還元焰焼成	屋蓋部	大仏類型?	区SX-6	未報告
4-1	昭和の森遺跡群内出土	還元焰焼成	九輪		表採	未報告 辰ヶ台遺跡か? 「大」他の刻書あり
4-2	昭和の森遺跡群内出土	還元焰焼成	屋蓋部	萩の原類型	表採	未報告 辰ヶ台遺跡か?
4-3	昭和の森遺跡群内出土	還元焰焼成	屋蓋部	萩の原類型	表採	未報告 辰ヶ台遺跡か?
4-4	昭和の森遺跡群内出土	還元焰焼成	屋蓋部	大仏類型	表採	未報告 辰ヶ台遺跡か?
5-1	葭山遺跡	酸化焰焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-2	葭山遺跡	酸化焰焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-3	葭山遺跡	酸化焰焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-4	葭山遺跡	酸化焰焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-5	葭山遺跡	酸化焰焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
	谷津遺跡	酸化焰焼成	瓦塔・瓦堂全部位(不完全)	上西原類型	001・090・010号住居跡 001号掘立柱建物跡他	相京他(1986)
	越川戸遺跡	還元焰焼成 酸化焰焼成	瓦塔 水煙・九輪 屋蓋部・軸部 基壇部他 瓦堂 屋蓋部・軸部	(還元焰) 大仏類型 (酸化焰) 東山類型	1号溝状遺構 15・20号掘立柱建物跡他	本報告書掲載

備考の文献は文末に記載。
屋蓋部類型は池田(1999-1)に準じている。

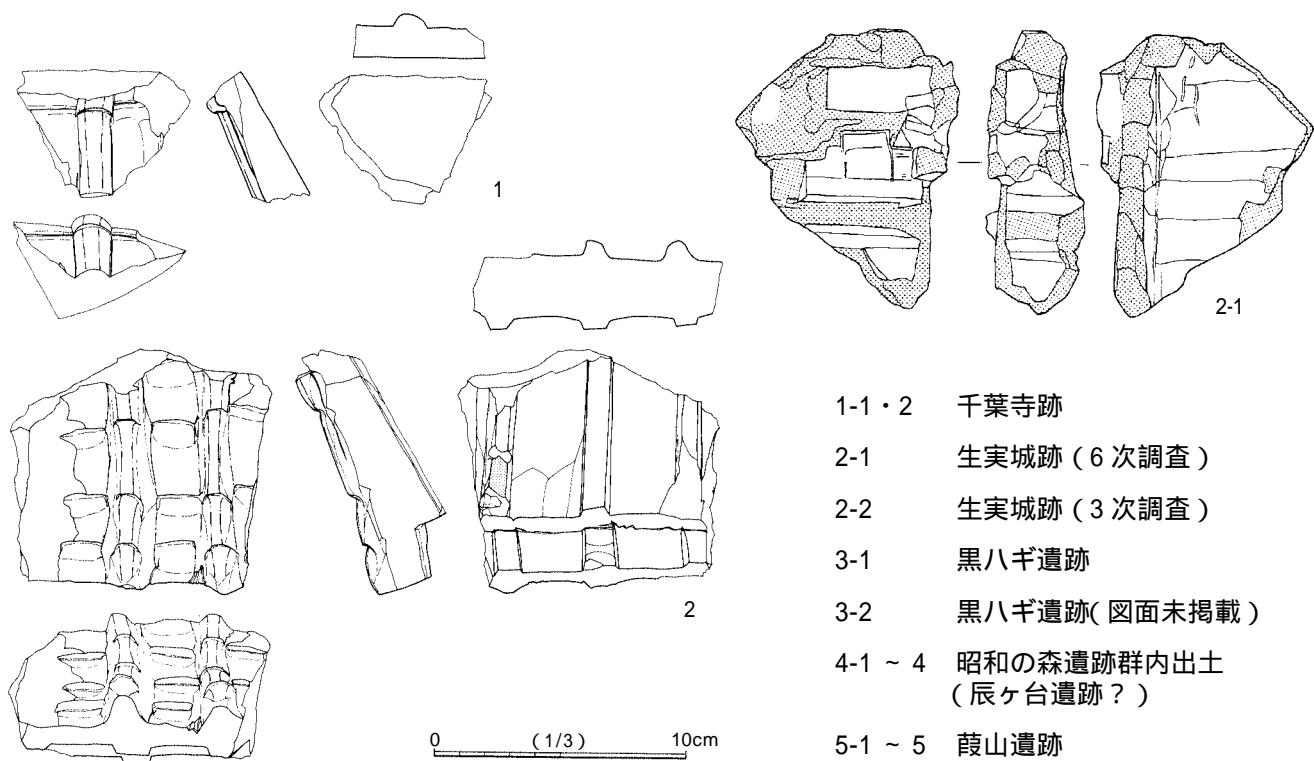
時代の遺構に伴うものではないが、周囲にその時期の遺構が存在していた可能性が考えられる。

2-2(3次調査)の部位は屋蓋部である。焼成具合は還元焰焼成で、赤色スコリア状の小石を含む堅緻で密な胎土である。隅木と瓦表現の関係から扇垂木を表現をしている可能性がある。上面は、丸瓦(幅約1cm)表現のみで、瓦の継ぎ目(継ぎ目間の長さは、先端が約1cm、先端から2・3番目が約1.5cm、それ以降が約2cm)は全て揃えて表現している。下面是、1本の垂木が残存しており、先端の飛檐垂木と地垂木の表現がなされている。飛檐垂木の幅は約1cm、長さは約2.2cmである。地垂木の先端は約1.5cmで、しだいに細くなり先端から約6cmのところで幅0.7cmとなり収まる。垂木間の幅は不明である。これらは、ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はない。これらの特徴は、池田氏の幅広工具押し引きB手法・ヘラ削り出しB手法に近い特徴である。

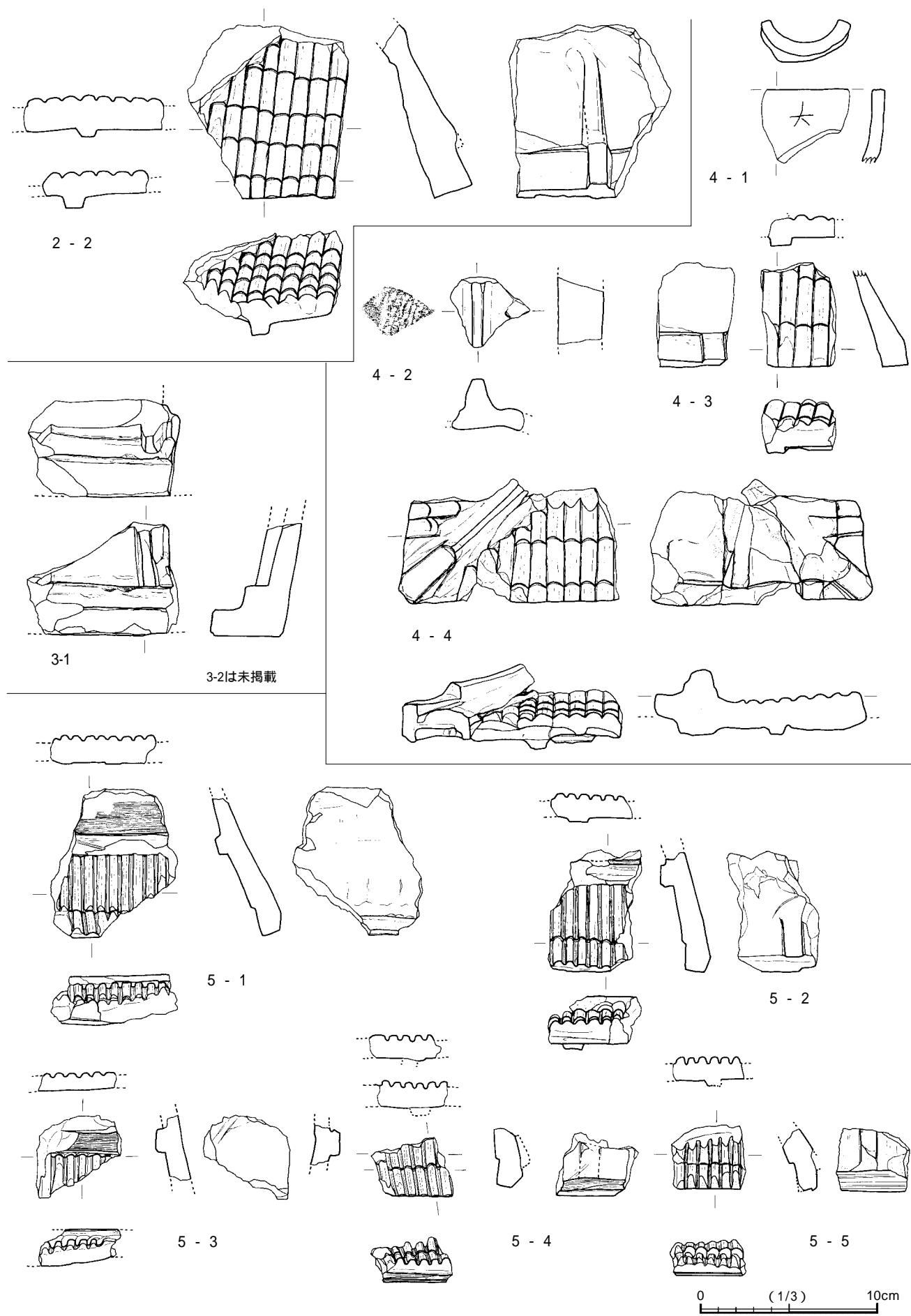
2-1(6次調査)の部位は軸部の上端隅部分である。焼成具合は酸化焰焼成で、組物(斗供)を表現している。越川戸遺跡出土の第60図-65・66と同じ様な残存部位であり、雰囲気もよく似ている。

黒ハギ遺跡出土瓦塔(3-1・2): 平成12年度調査のS X-2206(中世の遺構。谷頭上端部を利用した道状遺構や区画状の凹みの複合体遺構で地山のハードローム層まで造成していた。)で出土した資料である(3-1)。部位は、初軸の基壇及び開口部(戸口)と考えられる。焼成具合は還元焰焼成で、極めて堅緻で緻密な胎土を有する。基底部の幅は4.6cmで地長押、開口部の柱間に板扉をつるための枠も表現されている。柱間は約5cmである。柱表現の断面形は、長辺幅1.5cm・短辺幅0.6cmの台形状を呈しており、図面左側の柱が隅柱のようなので一辺三間の柱間が想定できる。

図化できなかった例(3-2)がもう一点、黒ハギ遺跡から出土している。本寿寺の南隣にあたる平成9年度調査区(区)のS X-6から一括遺物として取り上げられたものである。部位は、屋蓋部で



第77図 市内出土の瓦塔・瓦堂(1)



第78図 市内出土の瓦塔・瓦堂(2)

隅木も含まれている。焼成具合は還元焰焼成で、昭和の森遺跡群出土の瓦塔片（4-4）と胎土がよく似ている。上面は、丸瓦（幅約1cm）表現のみで、瓦の継ぎ目間の長さは約2.5cm前後である。丸瓦上端部が剥離により欠損する部分が多く、継ぎ目の長さはおよその値である。先端部は欠損しており、下面の垂木表現も残存しない。これらの特徴は、池田氏の幅広工具押し引きB手法に近い特徴である。昭和の森遺跡群内出土瓦塔（4-1～4）：これらは、千葉市教育委員会によって昭和55年に実施された昭和の森遺跡群内の「市町村の森」造成に伴う発掘調査で出土した遺物のようである。現在の辰ヶ台遺跡の遺跡範囲北端部分にあたり、円墳周溝が検出された調査区（昭和61年度調査の第 地点の2・3トレンチに西隣する地点）から出土したという記述が残る。調査時には「小食土廃寺と辰ヶ台遺跡の中間地点あたり」という認識であったようである。

4-1は九輪の破片である。焼成具合は還元焰焼成だが、軟質で表面の摩耗が激しい。筒部の推定内径は約3.2cm、厚みは約0.8cmで、下部縁辺部は残存していない。全体には口クロ整形を施し、上端平坦部は摩耗により成形痕は不明である。破片ほぼ中央部に「大」と判読できる刻書がみられる。また、不明瞭だが、破片左端に刻書のような0.3cm程の刻みのようなものが二本みられる。表面の摩耗などにより判別しにくい小さなキズだったので図面には表現されていない。さらに、この刻みの上部に管状工具による円形の押圧の一部らしき凹みも確認した。

4-2は屋蓋部の隅木部分の破片である。焼成具合は還元焰焼成である。図面左側に斜位にのびる屋根表現の一部が残存し、下面に布目痕がみられる。屋蓋部の4-4のものと胎土的にとても近似する。

4-3は屋蓋部の破片である。焼成具合は還元焰焼成である。上面は、丸瓦（幅約1cm）表現のみで、瓦の継ぎ目（継ぎ目間の長さは、先端が約2.3～2.6cm、先端から2番目が約2.8～3.1cm）はある程度意識して揃えるようにしているようにもみえるが不揃いである。下面是、1本の飛檐垂木が残存しており、地垂木部分は剥離していて残存しない。飛檐垂木の幅は約1.1cm、長さは1.5cmである。垂木間の幅は不明である。これらは、ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はないが、瓦と飛檐垂木部分の端面を赤彩しているようである。これらの特徴は、池田氏の幅広工具押し引きB手法・ヘラ削り出しA手法に近い特徴である。

4-4は屋蓋部で三つの破片が接合したものである。焼成具合は還元焰焼成である。隅木と瓦表現の関係から平行垂木を表現をしているようである。上面は、丸瓦（幅約1cm）表現と隅木上の稚児棟を表現している。瓦の継ぎ目（継ぎ目間の長さは、先端が約1cm、先端から2番目が約2.5cm、それ以降は部分的に欠損しており不明）は全て揃えて表現している。下面是、飛檐・地垂木の表現が二本分完存し、二本分飛檐垂木が欠損した状態で残存している。飛檐垂木の幅は約0.8～1cm、長さは約1.2cmである。地垂木の先端は1cmで、しだいに細くなり先端から約1.7～2cmのところで幅0.7cmとなり収まる。垂木間の幅は約3～3.5cmである。これらは、ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はなく、赤彩も施されない。これらの特徴は、池田氏の幅広工具押し引きB手法・ヘラ削り出しB手法に近い特徴である。

これらの他に屋蓋部・九輪の細片が9点出土しており、全て還元焰焼成のものである。九輪の細片は4-1のものと胎土の質感は同じであり、他の細片は4-4の屋蓋部とよく似ている。

因みに、4-3と4-4の屋蓋部の破片は別個体である可能性がある。還元焰焼成である点は同じであ

るが、瓦の継ぎ目表現が不揃いか揃うかという点と瓦当面の赤彩が施されるかという点で明瞭な差がみられる。また、胎土の質感も4-3の方が軟質で脆い印象が強く、4-4の方が須恵器の質感に近い。下面の垂木表現の削り出し方も4-3の方がメリハリがあり、4-4の方が粗く削りだしている感が強い。

霞山遺跡出土瓦塔（5-1～5）：これらは、「土気南遺跡群」報告書中の霞山遺跡（第57図-15～19・P472）に掲載されたものの中で、軸部上端の破片（報告書第57図-20）を除いて再録し、断面図・見通し図・下面図などを追加したものである。

瓦塔片は、昭和58年度に実施された調査の第二次調査区の南半でやや集中して出土している。瓦塔が集中していた範囲内にある4号土壙で「寺」「佛」、第一次調査区の1号住居跡で「果寺」といった寺の存在を示唆する墨書き土器が出土しており、未調査区域に瓦塔を伴う寺堂が存在している可能性が指摘されている。瓦塔片は細片を含め14点出土しており、調整具合や胎土から全て同一個体である可能性が高い。

5-1～5 全て屋蓋部の破片で、焼成具合は酸化焰焼成のものばかりである。瓦表現は軒先先端から一節目の結節（継ぎ目の長さ約1.3・1.6cm）を施すだけで、瓦ごとの幅は約0.7cmである。一節目の長さに1.6cmのものと1.3cmのものとにわかれると、胎土・調整的に差違はないことから単純に階層の差であろうか。屋蓋部上部の柱盤もしくは高欄の地覆にあたる突起部分の幅は、約1.2～1.3cmを測るが、その内辺の長さは不明である。突起部分の内側は細かいハケメを施した後に中心付近にナデ調整を施している（5-1）。下面には、垂木が一軒構成で施される。垂木幅は約1cm・長さが3cm前後で垂木間の幅は2.5cm以上3cm未満である。これらは、ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はなく、赤彩も施されない。これらの特徴は、池田氏の幅狭工具押し引きA手法・ヘラ削り出しC1手法に近い特徴である。

谷津遺跡出土瓦塔・瓦堂：千葉急行線（現京成千原線）の建設に伴い、1979年に財団法人千葉県文化財センター（以下、県セ）によって調査された地点から出土した資料である。谷津遺跡は、5世紀終わりごろから10世紀まで継続して集落が営まれる集落遺跡で、1976年の千葉市教育委員会の調査範囲（以下、市調査区）が集落の中心と考えられている。その中で鋳銅工房跡と目される遺構が検出され、印・錫杖などの鋳型と坩堝が出土した点でも注目される遺跡である。県セ調査区は、市調査区の北東側に位置し、集落の東側縁辺部と考えられる。その中の001号住居跡覆土中（埋まりかけの住居跡の凹み）から瓦塔の初軸と瓦堂の堂部などが出土した。また、隣接する001号掘立柱建物跡の内側及び南側からも屋蓋部や上層の軸部片が拡散して出土しており、建物が安置施設と推定されている。これらは、整形技法・厚さ・色調・胎土などによって細分化されている。塔は、屋蓋部五層・軸部四段分の部位を分別し、四層構造の五重塔に復元されている。しかし、伏盤から上部の九輪や水煙・竜車・宝珠といった部位は、出土しなかったことから推定であった。報告書では、塔・堂の屋蓋部の破片が6点掲載されているが、軸部の破片や復元された詳細な初軸の展開図面がないのが残念である。

瓦表現は軒先先端から一節目の結節（継ぎ目の長さ約1.5・2.3cm前後）を施すだけで、瓦ごとの幅は約0.7cmである。一節目の長さが1.5cmのものと2.3cmのものとにわかれると、単純な階層の差であろうか。下面の垂木は一軒構成で表現され、垂木幅は約1～1.5cm、垂木間の幅は1.5cm前後、垂木長は2.5～3cm前後である。瓦当面表現はなく、赤彩の有無は不明である。これらの特徴は、池田氏の幅狭

工具押し引き A 手法・ヘラ削り出し C 2 手法に近い特徴である。

池田氏による屋蓋部編年に則って時期比定すると、千葉寺跡例が勝呂類型（幅狭棒状粘土貼り付け手法・ヘラ削り出し A 手法）で 8 世紀第 2 四半期頃。生実城跡例（2-2）・黒ハギ遺跡例（3-2）・昭和の森遺跡群内例（4-4）・越川戸遺跡例（第57図-39～41）が大仏類型（幅広工具押し引き B 手法・ヘラ削り出し B 手法）で 8 世紀後葉～9 世紀初頭。昭和の森遺跡群内例（4-2・3）が萩の原類型（幅広工具押し引き B 手法・ヘラ削り出し A 手法）で 9 世紀初頭前後。葭山遺跡例（全て）・越川戸遺跡（第58図-49～51・第59図-52～59）が東山類型（幅狭工具押し引き A 手法・ヘラ削り出し C 1 手法）で 8 世紀末～9 世紀前葉。谷津遺跡例が上野原類型（幅狭工具押し引き A 手法・ヘラ削り出し C 2 手法）で 9 世紀中葉）となる。類型的には、大仏類型が出土した遺跡が最多で分布範囲も広く、千葉寺跡例を除けば、瓦塔の出土傾向が増加する時期の例が最も多いようである。しかし、谷津遺跡と越川戸遺跡の例以外は、古代の遺構に伴わず包含層や後世の遺構覆土中一括などの例が多く、出土したというだけで多角的な検証が行えない例ばかりである。そんな中、8 世紀第 2 四半期に創建されたとされる千葉寺で、その創建時期と時期的に重なる勝呂類型が出土していることは、千葉寺跡の寺院形成史を考える上で重要であり、瓦塔が伽藍を有する寺院にも供給された可能性を考慮する点でも重要である。

現在市域で出土が確認されている遺跡の分布は、中央区南東部と緑区に集中しており、市域の北半からの出土が知られていない。現状では分布傾向に明確な意味を持たせることはできないが、奈良・平安時代の集落分布の多寡などの検討と古代の郷域との整合性などを踏まえた上で、このような遺物が出土する遺跡の位置付けがなされるべきであろう。

主要参考文献

- 相京邦彦他 1986 『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書 大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群』
(財) 千葉県文化財センター
- 池田 敏宏 1999-1 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討 - 関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心としたもの -」
『研究紀要』第 7 号 (財) 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1999-2 「仏堂施設における瓦塔出土状況について(素描) - 土浦市・根鹿北遺跡出土瓦塔をめぐって -」
『土浦市立博物館紀要』第 9 号 土浦市立博物館
- 1999-3 「東国の瓦塔出土遺跡」『第 13 回企画展 仏堂のある風景 - 古代のムラと仏教信仰』
栃木県立しづけ風土記の丘資料館
- 2000 「瓦塔」『古代仏教系遺物集成・関東 - 考古学の新たなる開拓をめざして -』
考古学から古代を考える会
- 2002 「陶製仏殿についての若干の考察 - 編年・系譜・概念定義の検討 -」『研究紀要』第 10 号
(財) とちぎ県生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 糸原 清 1998 『千葉寺跡』『千葉県の歴史・資料編考古 3 (奈良・平安時代)』
財団法人千葉県史料研究財団
- 甲斐 博幸 1998 『大畠台遺跡群発掘調査報告書 小谷遺跡』(財) 君津都市文化財センター
2002 「木更津市小谷遺跡の景観 - 奈良時代小型堂塔出土遺跡の検討」『研究紀要』
(財) 君津都市文化財センター
- 川尻 秋生 2001 「第 2 編 第 5 節 民間仏教の広がり」『千葉県の歴史』通史編 古代 2 (県史 2)
- 菊地 健一 2001 『千葉市生実城跡』(財) 千葉市文化財調査協会
- 笠生 衛 1998 「古代集落と仏教信仰 - 千葉県内の事例を中心に -」『第 3 回特別展 仏の住まう空間 - 古代霞ヶ浦の仏教信仰 -』上高津貝塚ふるさと歴史広場
- 須田 勉 1991 「村落内寺院について」(シンポジウム平安前期の村落とその仏教 記録集)
『千葉県立房総風土記の丘年報 14 - 平成 2 年度 -』千葉県立房総風土記の丘
- 善端 直 1994 「北陸の古代瓦塔」『文化財学論集』文化財論集刊行会
- 武田 宗久 1974 「第四項 千葉寺と古墳 1 千葉寺」『千葉市史』千葉市史編纂委員会
- 寺門 義範 1989 『千葉市辰ヶ台・住吉・東住吉遺跡 - 昭和の森遺跡群昭和 60・61 年度調査報告書』
(財) 千葉市文化財調査協会
- 長原 亘他 2002 『千葉市生実城跡 - 昭和 63 年度・平成 3 ~ 6 年度調査 -』(財) 千葉市文化財調査協会
- 藤本 剛 2003 『日本靈異記』における仏教施設と在地仏教』『史学』第 72 卷第 1 号
- 山下亮介他 1996 『土気南遺跡群』(葭山遺跡) 財団法人千葉市文化財調査協会